回顧と懐古

阪倉篤義

最終講義を行なう機会をお与え下さいまして誠に有難うございます。只今はまた、西田先生から丁重な御紹介をいただいて恐縮致しております。見渡しますと昔ゼミで親しくしていた方々のお顔も見えますし、先生方のお顔まで見えまして、ちょっと緊張しておるわけですけれども、まあこれで四十何年間かにわたる教員生活の幕を閉じるということで、感慨なき能わずという気持ちが致します。

年寄りの常で昔のことを色々想い出します。先程西田先生の御紹介下さった『国語の歴史』というのは、昭和二十一年に、戦地から還ってすぐに国語学会の国語学基礎講座というのがあって、その内容を纏めたものなのですが、そのもうひとつ前、私、大学に入りましたのは昭和十三年、一九三八年で、今から五三年前になるわけです。時の主任教授は沢瀉久孝先生で、国語学の方は東大から橋本進吉先生が講師として集中講義に見えておりました。沢瀉先生のお名前は入学以前から承知しておりましたし、一般市民向きの話をされたのを聴いたこともありました。私は旧制の高等学校のときから国文学には興味がありましたし、割合に芝居やら能やらが好きで、去年辞められた菅泰男さんと一緒に能楽研究会を始めたりしておりましたので、能の研究でもしようかなと思って入ったのですが、入ってみて、実はちょっと驚いたわけです。最初の時間に、「万葉集講読」に出ましたところが、解説めいた話は何もなくて、大学院の先輩、こないだここで講演をされました小島憲之さんなんかが担当して、いきなり一首取り上げて、「第三字めは元暦校本では

こうなっております、西本願寺本ではこうなっております。この字とこの字は千禄字書では通用します。次に第七字めは……」という具合に一字ずつやられるわけですね。それがやっとすみますと、今度はその訓。訓は『略解』ではどうなっている、『古義』はどう、『新考』はどう、それで結局どれがいい、どれが悪いと、それを決めるまでには甲類乙類の仮名がどうの、文法的にはどうのという話が次々に出てくるわけです。旧制高等学校で全然聞いたことのないような本の名前ばかり出てきて、しかもそれが何の為にやられるのか、はじめは全然わからない。で、結局、江戸時代以来の諸説をずっと述べまして、自分はこれだと思う、ということで訓が決まりますと、それでもうほとんど一首の意味はわかるわけですから、改めて口語訳したりはしない。では、いよいよそれから一首の鑑賞が始まるのかと思ったら、それでおしまい。そこに至るまでにだいたい二時限ぐらいかかるわけです。当時は一時限が正味一時間五十分でしたが、それを二回分ぐらい使って、一首の短歌の訓が決まる。期待しておりました文学的鑑賞といったことは、特に何もないんですね。それで実は私、一緒の高等学校から入学した三吉陽という――これは高知の男で、愛媛大学の教授で亡くなりましたが――その友人と、「えらい所に来たなあ、これでは、まるであてが外れたなあ」「大学へ入ったら余程その、深い文学研究ができると思って来てみたら、何のことはない、字がどうだとか訓がどうだとか、そういうことばかりじゃないか」と言って、ふたりでなげいたことがあります。

何の為にそういうことをやるのかが、はじめは一向わからなかったのですが、だんだんわかってきましたのは、沢瀉先生のお考えでは、万葉集の研究というのは一首一首を正確に理解することである。一首一首を正しく理解するというのは、その歌をよんだ万葉人の心を本当に理解することであって、それが万葉集研究というものなんだと、こういうふうに、だんだんまあ、仰しゃることがわかってきました。歌の一字一字の異同、つまり元のテキストがどういう字で書かれていたかということ、そしてそれをどんなふうに訓み下したらいいかということ、そこから厳密にやっていかなければ万葉人の心はわからないのだと、そう先生は仰しゃるわけなんですね。万葉集の研究というのは究極そこへ行き着くのであって、それが所謂訓詁ということで、訓詁の学問をやる意味はそこにある、それが万葉集の文学的研究ということにもなるんだということが、朧気ながらわかってきたしだいなのです。

先生はよくこの歌をお引きになりました。御承知だと思いま

すが、巻十三の歌で、

「敷島の大和の国に人ふたりありとし思はば何か嘆かむ」

「敷島」は枕詞で、その日本の国に人がふたり「ありとし」の「し」は強めで、ありとさえ思ったならば、「何か嘆かむ」つまり「どうして嘆くことがあろうか」と、これは反語ですから「何も嘆くことはない」という気持です。これを、「この日本の国に、愛する人と自分とただふたりだけいると思うと何も嘆くことはない」、つまり「沢山人はいても、もう今、愛する人と自分とだけがこの日本にいるという、そういう思いがするから何も嘆くことはない」という意味に理解している註釈があるが、それはとんでもない間違いだ。それなら「ありとし思へば」という既定条件の言い方になる。「ありとし思はば」というのは「ありと思ったならば」という仮定の言い方で、「もしもそう思うなら何を嘆こうか、嘆くことはないのだ」というのだから、実際はふたりいないということになる。そしてまた、「人ふたり」の「人」を「人間」という意味に取るから誤った解釈になるのであって、万葉の「人」というのは「人間」という意味には滅多に使わない。自分と相手という場合に、その相手を「人」と言う。だからこの「人」というのは「自分の愛する人」のこと。「日本の国に愛する人があの人の他に別にひとり、つまり、ふたりいると思うならば何も嘆くことはない。けれども自分の愛する人はあの人しかいない、かけ替えのない人だと思うからこそこんなに切ない思いをするのだ」という意味に理解しなければならない。それをいい加減に読んで、「ふたりの為に世界はあるの」という感じにこの歌を読んでしまっては、まるで万葉人の心を理解しないことになってしまう。そういうふうに先生は言われまして、例えば「恋ふ」という場合に、現在の我々は「誰々を恋する」というふうに言うけれども、万葉集では絶対に「何々を恋ふ」とは言わないんで、「何々に恋ふ」という言い方しかしない。「〜に恋ふ」というのは、ある憧れの対象に対してひそかに恋しい想いをいだくということであって、「〜を恋ふ」というふうに積極的に相手を取り込んでしまうような言い方を、万葉集ではしない。そういう万葉人がよむ歌としては、「この日本に自分と相手とふたりしかいない」などというふうな恋の満足感をうたう歌ではなくて、もっと控え目に、「あの人しか他にはいないと思うから私はこんなに切ない思いをするのだ」という意味であってこそふさわしいのだ、と説かれました。

実は、元の歌では第四句が「有年念者」と書いてありますから、「おもへば」とも「おもはば」とも訓めるわけですけれど

も、これはどうしても、「おもへば」という既定条件ではなくて、「おもはば」と仮定に訓まなければならない。そう訓んでこそ初めてこの歌が、―万葉の心が、本当にわかるのだと、そういうことを例にされまして「まず君たちは現代的な感じ、現代的な考え方を捨てなさい。万葉の時代に帰って、万葉の時代の人たちの心というものがよくわかるようになって、初めて万葉集がよめたということになる。」と、先生は言われました。この場合、「おもはば」か「おもへば」かというのは、まあいわば文法の問題ですけれども、その訓み方一つでこの一首の歌の意味は全く違ってしまう。つまり、この一つのことばが正しく訓めたときに初めてこの一首の歌の意味が正しくわかったということになる。こういう方法を、所謂「訓詁」の学問では重視するのだということを力説なさいました。なるほど先生の意図されるのはそういうことなのだな、ということが、こうしてやっとわかってきました。無駄なことをやっているように思えた、一字一字の諸本の違いとか一語の訓みの違いとかいうことが、そんな重要な意味を持っているのだということが、その年の夏頃になると少しわかってきたわけです。

実はその方法は、沢瀉先生が始められたというわけではないので、「ことば」から「心」を理解するというのは、所謂「文献学」の方法であるわけです。ヨーロッパで、ギリシャ、ラテンの古典のことばの研究によって、古代人の心というものを理解しようとしたフィロロギーが生れましたし、日本では御承知の国学というものですね。契沖とか本居宣長とか、ああいう人たちの国学というのは、やはり同じように『古事記』や「日本書紀』や『万葉集』を正確に読み解くことによって、古代の心――それは、彼らに言わせれば外国思想の影響を受けていない、本来の純粋な日本人の心――というものを理解しようとしました。それにはまず、それらの文献の「ことば」の詳しい検討から始めなければならないというので、たとえば本居宣長は『古事記伝』というあの大著を書いたわけですね。あれは、お読みになったらわかりますように、ことばの説明ばっかりです。先生もその方法を実は受け継いでおられたわけで、なるほどこんな方法で文学を研究することができるんだな、と納得できたのです。

そこで考えますことは、現在我々が、現代の文学でも、あるいは過去の文学でも読みますときに、当然自分たちの気持を作中人物に移し入れて読んでいるのですね。それでなけりゃ、面白くもなんともないわけで、この人物はこんな気持なんだろう、こんなに悲しいんだろうとか、こういうふうに悩んでいるのだ

ろうとかいうのは、それは自分の気持をそこへ感情移入といいますか、そういうことをして感動しているのですから、過去の作品でも、現代の人間が読めば現代の感情・感覚をその作中人物に移し入れるということを、無意識にやるわけです。しかし、現代の心そのままのものを過去の人も持っていたというふうに決めてかかるのは、これはおかしいんですね。社会の構造も違うし、生活の様式も違う。そういう所に暮していた人が、現代の我々とおんなじものの考え方をしたり、感じ方をしたりしていたというふうに決めてかかることはできないわけです。共通点も勿論大いにあるはずですけれども、すっかりおんなじだというはずはありません。けれども、ついつい我々は、中世の作品を読んでも、もっと古い時代の作品を読んでも、その中の人物は今の自分とおんなじようなものの感じ方をしているんだと思い込んでしまう。これはうっかりやってしまうのですね。そうすると、それは極端に言いますと、最近流行っております、『枕草子』をマンガにしたようなのと変わりがない一面があるのじゃないか。つまり頭だけは今の髪型をして、十二単衣を着ている。これはパロディーですから、誰もそれをおかしいと言って文句は言わないのですけれども、実は我々はうっかりそれと同じことをやってしまうのじゃないか。『源氏物語』の中の女性が美しいといえば、今の美人の標準で美しいと考えているのじゃないか。今の細面（ほそおもて）の女優の顔かなんかを連想しながら、そんな美しさだというふうに感じてしまう。これはどうにも仕方のないことなんですけれども、そしてまあ単に小説として読んで楽しむだけならばそれでもいいのですけれども、多少研究的に読む立場に立つならば、それではいけないはずで、やはり沢瀉先生の仰しゃるように、『万葉集』を読む為には万葉人の心というものをまず理解して、その上でその人がこんなふうに喜びや悲しみや歎きを表現していると理解して初めて『万葉集』の読み方になる。『源氏物語』の読み方、『平家物語』の読み方についても同じことだということを、だんだん自覚するようになりました。

そうなってくると、実は意外なことに、我々がもう無条件にこうだと思い込んでいることが古代では違っている、古代の感じ方は違う、ということがありまして、ひとつの例を申しますと、今我々はあの梅とか桜とかが咲き誇っているのを見て、それを観賞して楽しむ。それは古代の人もおなじことです。ただ、我々一般の考え方としては、咲き誇っている桜や梅の枝を折りとって家に持って帰るなんてことは無風流な、どちらかと言えばまあ悪趣味であって、それらは野原に、あるいは庭に、自然

のままに咲き誇っているのを見るから美しいのだと、これは皆さん、そう普通に感じておられると思うのですね。自然は尊重しなければならない。自然のままで観賞するのが、本当の観賞の仕方だと、こういうふうに思っておられると思います。ところが、『万葉集』の歌を見ますと、

「春のうちの楽しき終は梅の花手折り招きつつ遊ぶにあるべし」（四一七四）

というのがあります。「春の楽しみの終、即ち究極は、梅の花を手折ってそれを家の中に招き入れて遊ぶことだ」というのです。「梅を招く」というのは、「梅を招き入れる」つまり「梅を手折ってそして自分の部屋の中に持ち込むこと」で、それが春の最高の楽しみだというのです。この一首に限りません。桜を折ったり、梅を折ったりする歌は他にも沢山あります。万葉の人たちは決して「梅や桜は自然のままに置いておけ、それを手折る奴は無風流だ」などとは思っていないのですね。普通我々は万葉の歌というと、「自然のまま」ということをよく言いますので、多分植物や草花も自然のままに観賞するという歌ばかりかと思ってしまうのですが、そういう歌も全然なくはありませんけれども、圧倒的に多いのは、「それを手折って楽しむ」という歌です。平安時代になりますと、確かに手折るよりは梅の花をそのままに見るという歌がありますから、むしろ時代が後になると今の我々の自然尊重みたいな感じになるけれども、古代の人は却ってそういう自然を自分の中に持ち込むことを喜びとしていたようです。　考えてみますと、われわれは、いわゆる生け花ということをやります。あれは確かに草花をわざわざ切って部屋の中に持ち込んで、それを楽しんでいるわけですね。我々にとっては、自然と人間とは対立しないのです。だから自然がそのまま人間の生活の場に入ってくる。それで、十分に自然は生かされているわけです。それに対して、人間と自然を対立的に考えるというのはむしろヨーロッパ風の考え方で、山を征服するとか、自然を征服するとかいうふうに、人間対自然という対立の関係で考える。だから逆にまた、わざわざ「自然を大切にしましょう」、「木や草は折らずに自然のままにおいときましょう」と訴えることにもなるのです。古代の日本人にとっては、自然と人間とはひとつですから、野原に咲いていても、それを手折って自分の世界へ持ち込んでもいいのです。そんなことを、しかし、今の私たちは、ちょっと普通は考えない。ということは、つまり、現代の我々は今の自然尊重の考え方がしみついてしまっていて、昔の時代の文学を読む時にも、これをそのままあてはめて考えてしまいます。これはやはり、本当

の鑑賞の仕方、理解の仕方ということからすれば、外れることになるわけです。

こうして私は、沢瀉先生の文学の研究方法というものが理解できましたし、目を開かれたような気持ちがしたのですが、けれども同時に私は、沢瀉先生の仰しゃることが全部肯定できたかというと、それはどうも出来ない点があるような気がしたのです。こういうことを言っても先生は許してくださると思うんですが、沢瀉先生が、万葉の心は非常に大切だからそれを理解しろと仰しゃる意味はよくわかります。先生にとってはそこが理想なんです。最高なんです。したがって、先生は全てその万葉の心を基準に考えようとされる。だから、古今集の歌は、「これは理屈です」といって問題にされない点がありました。これは、私どうも納得しにくいと思ったのです。もしも先生がそれぞれの時代の精神ということを尊重されるなら、古今集については古今集の時代の精神を尊重されるべきではないか。古今の歌人には古今の歌人の見方があり、考え方がある。その立場で詠まれた歌はその立場で意義を認めて理解しなければいけないんじゃないか。正岡子規は御承知のように「歌よみに与ふる書」で、古今集の歌はなってないというふうに言ってますね。正岡子規は文学者として、それで許されると思います。けれども研究者の場合は、ちょっと違うはずです。私は沢瀉先生に、学者として、恩師として、もちろん満腔の敬意を持ちつづけておりますけれども、この点に関しては、先生が同時にお持ちになっていた文学者的気質というものが強く出すぎたと言ってもいいように思います。私は、やっぱり研究者は研究者としての立場というものをどこまでも貫かなければならないんじゃないかというふうにいつも考えてきました。そこで問題はですね、読むのはいつも、現代の立場なんです。現代人の我々が読むのです。だからその際、現代的解釈というものを、よほど注意しなければ持ち込んでしまうのは仕方がありません。けれども、我々が研究的立場からやるべきことは、まずそれぞれの作品をその時代に位置づけて、それ相応の評価をして、その評価した結果を時代順に並べてみて、そして現在の立場から、その時代の作品としてそのものがどういう価値をもっているかという、そういう理解の仕方をすることだと思います。我々と違う世界に生まれた作品としてその作品をまず評価して、それぞれの時代に生まれたそれぞれの作品というものの立場を歴史的に眺める必要があるのじゃないか。歴史というのは、これは現代人の我々が書くのです。我々の目で過去を振り返って書くのです。だからよく言われますように、歴史はいく種類でも書かれる。

時代が変われば違う歴史が書かれるというのは当然です。しかしそれは、今言ったような形で各時代ごとに評価された、位置づけられた結果に対する判断が、変わってくるということであって、それぞれの作品そのものは、これは一度確立されれば変わりはしないはずです。ただそれを並べてみた時に、Aの作品がA′の時代に持った意義と、Bの作品がB′の時代に持った意義とはこう違う、ということがあるはずですね。それを、一つの理想をたててしまって、全てこの理想からいけばこの作品はダメ、この作品はいい、そういうふうに決めてかかって、日本文学全体というものをそういう立場で評価しようというのは、これは傲慢というものでしょう。我々は作品の前に謙虚でなければならないと思うのです。現代の我々の見方が果してどこまで正しいかは、本当は、わからない。その時代その時代の背景の上にその作品がどういう位置を占めていたかということの判定、その判定の客観的な正しさを求めていかなければならないと思います。

よく、「万葉から古今への変化」というふうな言い方をすることがあります。それはおかしいと、時枝誠記博士は言われる。「変化」というのは、例えばコップに水を入れといて、化学薬品を加えると色がだんだん変わる。それは変化だと言えます。しかし、「万葉集」の形が段々くずれて、いつのまにか「古今集」になる、「古今集」がまたくずれてきて「新古今集」になる、そんなことはあり得ないわけですね。「万葉集」という作品は、出来たままの形で今でも「万葉集」であり、「古今集」は今でも「古今集」です。一つ一つ別々の独立の存在なんです。それを我々が勝手に比較して、「万葉から古今へ、古今から新古今へ」という言い方をするだけです。それは、だから「変化」というべきものではないのですね。変化というのはそのものの質が変わることですが、その評価は変わっても、「万葉集」そのものは絶対に変わらないのです。ただ万葉も古今も新古今も或いは近世の和歌も、和歌文学という共通性を持っている。それぞれ別個の存在だけれども、たまたま同じジャンルに属する文学であるからというので、その文学の質を比較したり、影響関係を考えたりすることができる。それぞれに独立の価値を持ち、それぞれに評価できるものだけれども、ただその間に、虚子のいわゆる「こぞ今年貫く棒のごときもの」、その「貫く棒のごときもの」が認められるのですね。和歌文学という一本の棒がずーっと通っている。ただその一本の棒が時代によって色々に形を変えて現れています。何故そうなったかということを、我々は客観的に判断してみなければならない。文学史を考

える立場というのはそういうものですね。「万葉集」は万葉人によって生まれ、「古今集」は平安初期の人達が生んだ、そういう背景があって同じ和歌という文学が色々に形を変えている。それを今の立場から見て、この時代の和歌の方が、この時代の和歌よりも日本の和歌文学の本質からして意味があったとか、なかったとかいうような判断はできますね。しかし、何度も申しますけれども、あくまでそれは、現代の和歌の理想を基準にするのではなくて、それぞれの時代にその文学が持っていた価値をまずはっきり認めて、それを現代の我々の立場から、もう一度判定をする。そこで文学史が書かれるということになります。文学史的研究の場合は、そういう立場でそれぞれの時代の文学を考えなければならないというのが、私の――これは何も私だけの考えていることでなく、多くの人たちが考えておられることですけれども――考え方です。

つい先日も私、京都の街並を保存する運動というのに協力を頼まれたのですが、お断りしました。すると、その人は、意外な顔をして、「先生は古代語を研究したり、古代の文学を研究したりする方じゃないですか。歴史を保存するのに反対ですか。」と言われるから、「私はそういう運動の意味がわかりません。」と言ったのです。京都の街並を保存するというのは、今の京都の一部の低い二階建ての街並をずっとそのまま残しておこう、高いビルディングは建ててはいけない、という趣旨らしいのですね。「何のためですか。」と言うと、「それは古い京都を残すのです。」と言う。「古い京都っていうのはどういうことですか。古い京都といえば平安時代の京都が一番古い京都じゃありませんか。今建っている建物は、あれはほとんど、せいぜい江戸時代以後の建造物です。本当に古い京都を残すというのなら、平安時代の建物を遺さなければならなくなります。江戸時代にできた街並を、これが本来の京都であるなどと一体誰が決めたのですか。あなた方は勝手に「京都らしさ」というイメージを作りだして、「これが京都だ、京都だ」とおっしゃっているだけではありませんか。それを保存するために、高いビルディングを作っていけない、京都駅は低い建物にしとけと、そんなことを言うべきではないと私は思う。何故なら、京都の街並が美しいのは、そこに人々が代々住んできたからなのです。生活があったから、あの建物たちは一つの美しさを保ちつづけてきたのです。今や時代は変わってしまって、家内全体が冷暖房化されるとか、衛星放送が見られるとかいうことになりました。そのための大きなアンテナを立てるのは京都らしくないからやめなさい、室内暖房もあきらめなさい、あなた方京都人は、

京都の美を守るために、寒くても暑くても辛抱して昔のままの低い建物で、狭い店舗で我慢して暮らしなさいと、そんなことを言う権利は誰にもないのです。高層建築がいけないというのなら、低い建物の並ぶ中に本願寺のようなあんなでっかい建物は不釣合なわけですが、誰もそんなこと絶対言わなかったのですね。御所はいいけれども、二条城は目障りだ、などとは言わないで、それらを全部取込んで一つの調和を生み出してきたわけです。それを、これから後は、大切な観光資源だからこのまま変えずに残しておこうというのは、随分勝手な言い分だと思うのです。もしも、明治村みたいに、建物だけを保存するならそれはそれで意味があります。単に博物館としてですね。しかし、そこからは、もはや「京都らしさ」、その街並の美しさなどというものは生まれてこないでしょう。

新しい時代には新しい建物ができて当然だと思うのです。東寺の塔が建立されたとき、本願寺の大きな建物が創建されたとき、そして、近くは京都タワーができたとき、人々は、はじめは皆びっくりし違和感を持ったに違いないのですが、いつのまにかそれらがちゃんと街並に融け込んでしまって、そして今の京都の街ができている。ある時点で歴史を止めてしまって、「ここから後は変えません」「以後はこのままに保存します」というのは、大変不自然な話だと思います。そこに人間が生きているのだから、生きている人間に即して建物が変わるのは当たり前のことです。大きなビルディングができたら、またそれなりに京都の街は、そういうビルディングを含み込んだ美しさを持ってくるはずです。そうしてこそ、初めて生きた街なんですね。ゴーストタウンにしてしまうのでは意味がないと思います。

たまたま私は「ことば」を専門にしておりますが、「ことば」というのも、そういうものなのですね。「京都のことばは美しい、だから、京都のことばを残しましょう」という運動を、もし始めたとします。「今の京都ことばを永久に保存しましょう。これからは、どんなに標準語で喋りたくても、京都ことばで、今の京都ことばで喋りなさい」というふうなことを、人々に強制できるでしょうか。「ことば」は、時代が変われば変わるのが当然なのです。それで面白い例がありますけれども、京都に「千吉（ちきち）」という古い呉服屋さんがあるのですが、そこに昔から勤めていた番頭さんに話を聞きに行ったことがあります。その番頭さんの話では、「今色々思い返してみると、中京（なかぎょう）の方言は、日露戦争から後にものすごう変わりましたナア」と言う。それは、明治三十七、八年戦役後の経済的発展で全国的な流通機構が整うと、京都の呉服を中国地方の呉服屋さんがどんどん買い

に来るようになった。広島や山口や松山あたりの人がたくさん京都へ仕入れに来て、その人達と商談をする時に、京都弁で「そらあきまへん」「どうどっしゃろ」とやっていては、商売が捗らんのです。だから、私達は自然に共通語で話すようにしました。そうしなければ商売にならなかった。それで、中京の純粋の京ことばというのはその時代に大きく変わりましたと、こういう話です。つまり、変わるべくして変わったということですね。社会状勢が変わりますと、京都ことばというようなものも、そのまま保存しようとしたって保存できなくなるのです。何故ならば、その人達には生活が懸っていますから、自分達が生きるために、ことばを変えたわけです。こうして「ことば」といいうものは、ある年数が経てば必ず変わります。社会がもしも死んでしまえば、「ことば」の変化はそこでストップしますけれども、生きた社会ならば、必ずそこで使われる「ことば」は変わっていきます。人々の物の考え方が変わり、生活条件が変われば、それに応じてコミュニケーションの要具である「ことば」というものはどんどん変わっていきます。それは極めて当然のことなのです。「町並をそのままに残しなさい」というのは「ことばをそのままに残しなさい」というのと同じで、できることじゃない。やることに、非常な無理がある。自然林をそのままに残そうというのとは話が違うわけで、大変な不自然さがありますし、そしてまた、無理にそういうことをやって何の意味があるのでしょう。単に観光客がもっている京都に対する懐古趣味に迎合しようということであるならば、本末転倒も甚しいと言わなければなりません。

「ことば」は、本来変わるべきものであるといっても、勿論、勝手に放っておいていいというものではありません。ある程度の規制を加えることが、コミュニケーションの機能を十分に果すために必要になります。私は、過去の「ことば」は過去の「ことば」として非常に貴重だと思います。今後もどんどん研究を深めて、古い資料を十分尊重して、その実態を明らかにすべきだと思います。戦後何十年間だけでも、「ことば」の研究は、ものすごく進みました。古い資料が新しく発見されたり、また、それ対する研究が非常に細かくなって、最近は、コンピューターを使った研究が行われたりするようになりました。こうして、消えてしまった過去の日本語を明らかにするということは、それ自身大変意義を持つことですが、過去を知るということは、同時にまた未来を知るということになるのです。日本語の歴史を振り返ってみますと一つのエポックが、まず紀元八〇〇年頃にありますね。七九四年に奈良から京都に都が遷りま

すが、それまでの奈良時代の「ことば」と平安時代の「ことば」とはかなり違います。そして、平安時代というのは、だいたい一二〇〇年頃まで続くわけですね。最後の百年間は院政時代と言われてますが、次の鎌倉・室町の時代になりますと、平安時代の「ことば」からかなり変化して、中世語という形になります。つまり、この間にも一つのエポックがある。そして、その中世語に始まった言葉の変化がだんだん強くなりまして、大体一六〇〇年頃以後の江戸時代の「ことば」になります。江戸時代の「ことば」になりますと、現代語に大変近い要素がでてきます。完全に同じではありませんけれども、発音なんかの面では、ほとんど変わりがないと言ってもいいくらいに変化してきます。こういう変化は勿論ぽつぽつ起こってきたのであって、ある時点でパッと変ったわけではありませんけれども、こうして見てきますと、ほぼ四〇〇年ごとに区切りができそうです。遡って紀元四〇〇年という頃、つまり五世紀の初め頃から、日本の文化にある変化が生じてきて、以後四〇〇年単位で変ってきたと考えられる。そうすると、やがてもう十年ほどたつと紀元二〇〇〇年で、次のエポックがくることになります。実はその間に私達が非常に大きな変化だと思っている明治維新が一八六七年という年にあったのですが、江戸時代と明治時代の「ことば」の変化というのは、あまり大きくないのです。単語の違いはありますけれども、発音なんかの面では、この二つの時代でそう大きな変化はない。寧ろ、あと十年ほどの所が一つのエポックになるのではないか。コンピューターとかワープロとかそういうものが、これほど盛んに用いられるようになりますと、「ことば」は当然変わってくると思います。日本語の歴史は一六〇〇年の次は二〇〇〇年あたりに一つのエポックが認められることになるのではないかという気がします。

これは、もちろん一つの予測にしかすぎませんけれども、とにかく、我々は継続と変化ということを、いつも睨み合わせて考えていかなければならないというのが最後に申したいことなのです。例えば、坪内逍遙とか森鷗外とかいうのは、あなた方にとっては、まあ歴史上の人物という感じが強いと思います。けれども実は、坪内逍遙が生まれましたのは安政六年、一八五九年という年で、森鷗外はちょっと後の文久二年、一八六二年の生れなのです。共に生れは江戸時代ですが、そこで話が突然私自身のことになりますけれども、私の祖父が生まれたのが嘉永五年、一八五二年なんです。ということは、私の祖父は坪内逍遙よりも七歳ほど年長なんです。坪内逍遙は長生きしました（昭和十年没）から私にも同時代の人という感じがありますが、

森鷗外なんていう人は、古い人だという印象を一方で持ちます。けれども、なんと私の祖父よりも十歳も若い人なんですね。祖父は、私にとって非常に身近かな存在で、私の中学生の時に亡くなるまで、毎日一緒に暮らしていた人です。そう思うと私には鷗外が過去の人だとは考えられなくなります。そういう一面があるかと思うと、しかしまた、私のじいさんは、とにかく若い時に、丁髷で、刀差してた人物ですから、その祖父と私が、例えば深刻な人生問題みたいなことを話し合ったとしたら、本当に話が通じ合っただろうか。恐らく、擦れ違い擦れ違いで、とても話にならなかったと思います。十数年間、朝から晩まで一緒に暮らしていた非常に近い人でもあり、同時にまた遠い人でもある。そう考えると、森鷗外の言っていることを一応分かったように思って読んでいるけれども、本当に感覚的なところまで分かってるのかな、という反省をせざるを得ない気も致します。そういうものだと思うのですね。つまり、ある意味ではたしかにつながっています。ある意味ではつながっていますが、ある意味では離れています。そんな形で私たちの歴史というものは続いてきたわけです。最近の世界の大きな動きを見て、あなた方も感じておられると思いますが、私自身について言いますと、実はロシア革命が起こったのは私の生まれた一九一七年で、ソヴエト連邦と私とは同い年なんです。そして、あの世界の二大強国の一つであった国が、私が死ぬまでにもうガタガタになってしまった。ソヴエト連邦の歴史は、私の一生よりも短いというわけです。永久に続くかと思われていたものが、案外に脆いのだなあ、という感慨を持ちます。

今から二十年ほど前に、大学紛争というのがありまして、私は、たまたまその矢面に立たされて、随分苦労しました。もう本当に大学を辞めたいという気がするくらい悩みました。学校の中がゴチャゴチャに荒れて、部長室も占拠されてしまって、一年間用務員さんの部屋に同居したりしたこともありました。「これからの大学はこんなものなんですよ。きちっと黙って講義を聴いている学生なんかいなくなる。そして、日本も社会主義国になってしまう。これはもう歴史の必然なんだから、その点は部長、覚悟しましょう」と、そう言う先生まで出てきて、私は、本当にそうじゃないかという気がしました。本当に資本主義なんてものはもうおしまいで、これからは社会主義の時代が来るのじゃないかと。そういう時に、大先輩の柴田実という日本史の先生が、「阪倉君、辛いだろうけれども我慢しなさい。応仁の乱だって終わったんだから」と言われたことがあったのです。この話をすると、「応仁の乱か」といって皆笑うのです

が、私は大変有り難く思いました。「なるほどそんなものかなァ」と思ったのです。あの応仁の乱の最中に、京都の人は、もうこの世の終わりと感じたに違いない。しかし、あれほどの大乱も終わってしまえが終わってしまったで、歴史の流れは悠々として続いたのですね。終わりのないものはないと同時に、永遠に流れて行くもののあることを忘れてはいけない。つまり、我々は、あまりこう、目の前の変化というものを大きく見すぎてはいけないのです。それにつけて、私の好きな言葉を最後に申し上げたいのですが、それは世阿弥の『拾玉得花』に見える言葉ですけれども、ある人が尋ねる、「無常とはどういうことですか」と。それに対する答えは、「飛花落葉」。咲き誇った花が散ってしまい、青々としていた葉が秋の風に枯れ落ちる。これはまさに「無常」というものを最も典型的に表しているというのです。そこでまた尋ねます。「それならば、常住不滅とはどういうことですか」。この問いに対する答えもまた「飛花落葉」。つまり言っている意味は、花が散り葉が落ちるという現象、これはまさに無常のあらわれそのものである。けれども、今年そういう現象が起こってそれでおしまいかというと、来年の春にはまた花が咲き、そして散り、葉が繁り、そして秋になると散る。同じ現象が毎年毎年、恐らくは永久に続いていく。これほど常住不滅を表わす現象はないではないか、というのです。こういうものの感じ方、考え方は、私達の生活にとって必要なもののように思います。一つの困難な局面に立たされますと、その局面だけがものすごく大きく目に映りまして、いつまでもここから抜け出せないという絶望的な気がするのですけれども、それは、その年の「飛花落葉」だけを眺めている立場であって、もう少し目を大きく開けば、実は、そういう現象もまた、永遠の流れの中の一局面にすぎないということに気がつく。私もまたそういうふうに考えて、今まで何度か私なりに危機を乗りこえてきました。考えてみると、学問をするということは、結局こういう「物の見方」を身につけることなのじゃないでしょうか。専門的知識は忘れてしまってもいいのですけれども、物事を客観的に、歴史的に眺める目、そういう心の余裕みたいなものができるのが、これが学問をしたということの、いわば効用でして、皆さんが大学まできて勉強されたその効果は、実はそういう「智恵」を身につけられたということにあるのじゃないか。昔を想うにしても、「懐古」つまり単に過去をなつかしむセンチメンタリズムにひたるのではなくて、過去を顧みて将来を考える「回顧」ということが大切なのだと思います。長い間の御好誼ありがとうございました。これでお別れいたします。